

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391000108		
法人名	医療法人 社団 孔子会		
事業所名	ブルーホーム まゆの里		
所在地	熊本県菊池市泗水町福本780番地		
自己評価作成日	令和6年 12月 14日	評価結果市町村報告日	令和7年 3月 8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do">http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 九州評価機構		
所在地	熊本市中央区神水2丁目5番22号		
訪問調査日	令和7年 1月 14日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者一人ひとりのペースに合わせ願いや希望を1つでも多く叶え安心して生活できるように職員も寄り添い共に支え合いながら暮らす喜びの実現を目指しています。  
毎月の勉強会では、まゆの里職員が講師となり勉強会を行っています。そこで学んだ事を活かし、質の高いケアの提供ができるよう取り組んでいます。また、季節に応じたイベントの計画・開催を毎月行っており、日々の生活が生き活きとした1日になるよう職員全員で支援しています。日々の暮らしを大切に、尊重されていると実感できるようなケアを目指しています。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は地域に馴染みのある場所であり、感染症対策等で外部との関わり作りが難しい中、様々な形で地域や御家族との交流を続けておられます。中には数日と間を置かず面会に来てくださる家族もおられ、他にも入居者との外出や外食等、御家族の関わりが聞かれました。事業所では認知症チームケアに取り組まれており、他にも離床センサーや眠りスキャン、介護ロボットの導入、アンガーマネジメント研修等、ケアの質を高めながら職員の負担軽減等に繋がる取組みもみられます。近年介護度も高くなり、車椅子利用の入居者も増えたため、個別ケアも増えてきているようです。職員面談では「バタバタしないように気をつけている」の言葉もあり、入居者の穏やかな生活は職員皆さんの対応が表れていることを感じる事業所でした。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	名刺ケースの裏に事業所の基本理念をいつでも見れるよう携帯している。	理念は掲示、携帯により職員への共有を促している。入職時の説明の際、理念についても話す機会を持っている。感染症対策から理念の唱和がなくなっていました。	理念の共有と実践について、感染症対策に考慮しつつ、理念の唱和に代わる取組の工夫をすることが期待されます。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域交流は難しい状態であるが、地域の清掃活動に参加したり子供会による廃品回収で地域の子供達と交流できた。まゆの里通信を2ヶ月に一回作成し、地域の回覧板に入れてもらっている。	行事等での入居者と地域の交流はコロナ禍以降難しい状況が続いているが、地域で開催されるマラソンの応援や文化祭への作品出展・見学、祭りの見学等、数人ずつではあるが出向いた。職員の清掃活動参加や子ども達との交流は継続したものである。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	感染予防の為、月1回行っていた認知症カフェは今年度開催できなかった。キャラバンメイトに登録を行っている職員が講座を行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染対策を行いながら、2ヶ月毎に開催し利用状況やまゆの里通信を用いてホームでの様子や事故やヒヤリハットについてなど報告し、参加者より意見を頂いている。	2ヶ月毎の会議では、通信や写真を用い、事業所の取組を説明している。会議には医師も入ることでアドバイスも頂いている。職員不足の際には行政をはじめ参加者からも意見を頂いた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には市の担当者にも出席してもらい、意見を頂いている。高齢者地域見守りネットワークへの協力等、日頃から行政との協力している。	運営推進会議参加の他、市の高齢者地域見守りネットワーク登録事業所となることで、地域包括と連携し、困っている地域住民への協力を行っている。キャラバンメイトとして認知症講座に参加した職員もいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、法人の勉強会やミーティングにて身体拘束について勉強会を行い意識向上を図っている。法人の身体拘束適正化委員会も定期的に開催し参加している。	法人勉強会では年に複数回身体拘束に関するテーマを持っている。職員にも出来るだけ参加を促しており、参加出来ない際は資料配布している。法人の身体拘束適正化委員会にはホーム長が参加している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内の勉強会やミーティングにて高齢者虐待防止について学んでいる。日頃のケアの統一に努めている。虐待防止委員会も定期的に開催し参加している。		

グループホームまゆの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内の勉強会にて成年後見制度等の権利擁護について学んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約・解約時には利用者や家族が納得できる説明を行えるよう十分な時間の確保を行っている。介護報酬改定等で、利用料金に変化する場合はその都度説明を行い、同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居前に、契約書や重要事項説明書の内容について説明し、不明点がないか確認を行っている。また、ご家族代表に運営推進会議に参加いただき、ご意見をいただいている。意見箱の設置も行っている。	入居前から家族と面談し、契約内容等の他事業所に関する説明を丁寧に伝えている。入居後は運営推進会議や日頃の面談、電話連絡等を利用し、意見をj得る機会としている。家族へは日頃から入居者の日常の様子等を伝えるようにしており、意見をj表しやすい関係作りにも努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者と個別に面談を行う機会があり、意見や想いを伝えることができる。業務改善を行う際にも聞き取りをされる。	管理者も業務に携わっており、職員はいつでも管理者へ意見や提案を表すことができる。毎月のミーティングでは業務検討もj行い、職員間での意見交換もj行っている。年1回以上は管理者による個人面談を行っており、個人的な意見をj表す場もj設けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を取り入れ、個別に評価を行っており、それぞれ面談にて助言ややる気につながるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人一人が外部の研修を受ける機会があり、成長につなげることができている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部の研修やオンライン研修などの際に交流を図っている。		

グループホームまゆの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には本人と面談を行い本人の困りごとや不安なこと、生活の様子や身体状況についての確認を行っている。それを基に情報提供書が作成され職員間で情報共有を行い本人が不安にならないよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前には家族と面談を行い、困りごとや不安なこと、これまでの経緯など聞き取り今後の信頼関係が築けるようにしている。また、いつでも気軽に相談してもらえるような、関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の状況や思いや要望を聞き、現状が当ホームの利用に適切であるかを考え対応している。必要に応じて、居宅のケアマネ・病院等と連携し、他のサービスが適切な場合はサービスの紹介をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	理念でもある「共に生き、共に暮らしをつむいでいきます」が実現できるよう、暮らしの中で入居者、職員が共に助け合い、可能な限りできる事はしていただき、料理など職員も教わりながら暮らしを行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	感染対策を行いながら、対面面会や窓越し面会を行っており、本人と家族の絆を保てるよう支援を行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人との関わりが途切れないよう感染対策を行いながら面会できるようにしている。	感染症対策に努め、家族との関係が希薄にならないよう、面会方法を工夫して、できるだけ受け入れています。馴染みのある美容室の利用等は希望があれば支援を行う。知人や地域ボランティアの来訪も受け入れている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事やレクリエーションなどリビングで過ごしていただき、入居者間で交流できるようにしている。リビング席やテーブルセッティングは入居者の関係性やADL等に注意しながら支援している。		

グループホームまゆの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も、状況を尋ねたり、相談にのったり状況に応じて必要なサービスを紹介をしている。ホームでの様子を家族に伝え、今までの暮らしが継続できるようにしている。必要時、入居時の写真の提供を行っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	担当が本人の思いや暮らしについての希望を伺い、日常のケアに活かすよう努めている。意向の確認や困難な場合には、日頃の様子や生活歴などから検討している。	入居者の意向は職員の日頃の寄り添いで把握している。意向の表現が難しい入居者には、生活歴や家族等の意見も参考に、どのようにすればよいかを職員間で検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居者や家族から情報をいただき、現在の体調や能力を踏まえ、可能な限り今まで行ってきたことが続けられるよう支援します。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活のリズムを把握し、できる限り希望に沿った支援を行っている。毎日の申し送りでも、一人ひとり情報伝達を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族、担当より意見を聞き取りケアプランの作成を行っている。モニタリングも同様に聞き取りを行い計画作成担当者が行っている。	モニタリングは入居者の担当職員の聞き取り等で行っている。介護計画は担当職員の意見を確認し、家族の意見・日頃の記録も参考に作成している。BPSDを予防・軽減するケアの基本的考え方を理解し、チームで実践できる体制を構築するため、認知症チームケア推進会議を実施されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	24時間通してSOAP記録を行っている。日々の様子や利用者の言葉や職員の対応などを記録している。特に全職員へ共有すべき内容は申し送り記録として記録し確認するようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々の観察を行い、入居者のできる事わかることに着目し、どのような支援を行えばできるか話し合いをしている。また、毎日の申し送りで、一人ひとり情報伝達を行っている。		

グループホームまゆの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	見守りネットワークの活用などを行っている。新型コロナウイルス感染予防の為、認知症カフェの再開はできていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居申し込み時にかかりつけ医の確認をし協力医療機関についても説明し利用者、家族の意向に沿う形で対応している。その後の受診や往診などの対応についても家族と連携を図っている。	入居以前からのかかりつけ医の継続した受診を支援している。近隣への通院は職員も付き添うが、遠方の医療機関を希望される場合は家族への通院協力をお願いしている。入居者の身体状況等の変化により、往診ができる医療機関への変更を家族へ相談することもある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	変化があった時だけでなく、普段からホーム内の看護職員と連携し相談、対応ができるようにしている。異常時には、家族へ相談を行いかかりつけ医や必要な医療機関への受診を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には、ホーム内での様子を情報提供している。入院後も、家族や入院先の相談員や看護師と連携し、情報交換や今後についての相談等を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居申し込み時に重度化された場合や終末期の対応について説明し、その時点での本人、家族の意向を書面にて確認している。入居後も状態変化時等必要時には再確認している。	入居時に重度化や終末期における事業所の考えと対応を説明し、入居者・家族の意向を確認している。実際にその時期を迎える時や身体状況変化等には家族の意向を都度確認し、関係機関と話し合いを重ね支援を行う。希望があれば看取りまで支援を行うが、医療が必要となった際には入院となる例も多い。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年心肺蘇生法とAEDの使用方法について消防署から来ていただき、職員研修会で行っている。緊急時のマニュアルがあり、必要時にはマニュアルに沿って行っている。事業所内にAEDを設置している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人内の事業所と連携し、消防署立会いのもと年に3回昼・夜間想定避難訓練を実施している。防災委員会にて備蓄品の管理、マニュアルの見直しを行っている。	避難訓練は隣接する法人事業所とも連携し、役割を作って入居者も一緒に行っている。実施後は消防署より講評を受け、振り返り反省も行っている。今年度は法人合同でBCP研修も行い、事業所でも説明を行った。	避難訓練が火災を想定した訓練ばかりなので、地震や水害などを想定した訓練の実施も期待されます。

グループホームまゆの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーが保てるように居室は入居者自身がカギをかけられるようになっている。人生の先輩として尊重し、丁寧な言葉かけや対応するようにしている。	「人としての尊重」や「一人ひとりの思い」は理念や目標の文言でもある。職員から入居者への声掛け・言葉遣いには特に配慮している。プライバシーの確保として、居室は入居者の意志で中から鍵をかけることができる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	毎日の生活の中で飲み物の選択や入浴時間など利用者が自己決定できるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを把握し、その人らしく穏やかに生活できるように入居者に聞きながら、希望や願いをかなえられるよう取り組んでいる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節にあった清潔な衣服を選んでもらい、外出や行事がある時などは、化粧品やアクセサリを付けたりし、おしゃれを楽しんでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節感を感じることができるような食材や料理の提供を行っている。おやつ作りを一緒に行ったり、食事後の下膳の手伝いなどもできる方にはしていただいている。	現在は配食を利用しており、季節行事や特別食も準備されている。季節を感じる果物等も提供している。入居者の誕生日には家族より差し入れもみられることもある。下膳等、入居者のできる範囲でお手伝い頂く場面もある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量は個別に把握し記録をしている。医師の指示にて栄養補助食品の提供を行っている入居者もいる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとりのペースに合わせ口腔ケアの声かけを行い支援している。口腔内の確認や不具合がないかの確認をし必要時には歯科往診などへの相談を行っている。		

グループホームまゆの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の頻度、量、性状などを観察しながら使用する物品や介助方法について検討している。夜間のみPWC使用やパッド装着など状態に合わせて対応している。	出来るだけトイレでの排泄にむけ支援している。夜間はポータブルトイレの利用もある。失禁が増えた等検討が必要な際は担当職員がモニタリングを行い、職員間で検討する。パット等利用や大きさ変更の際には尿量等を家族に具体的に示し、同意を得ている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分補給や適度な運動を行い排便が出やすい環境作りを行っている。毎日10時のティータイムには、牛乳の提供を行って便秘予防に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は温泉のお湯を使用し、入浴の声かけに対し、別の日を希望されたりする方は柔軟に対応し、週2～3回の頻度で入浴を行っている。また、一人一人のADLに合わせ、リフト浴や檜浴を使い分けを行っている。	温泉を利用した浴室は檜風呂・リフト浴があり、それぞれの身体状況により利用している。毎日入浴できる準備があり、現在は週2～3回の入浴が基本となっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室やリビングのソファーや畳の間など思い思いの好きな場所で休んだり昼寝をしたり本人のペースにて過ごしてもらっている。夜間は室温湿度の調整を行い、安眠できるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの処方箋を毎月ファイリングし、いつでも職員が確認できるようにしている。服薬前には2人で確認し誤薬予防に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	台拭き、洗濯干しやたたみ、下膳、メモ帳作成、おやつ作りなどできる事を無理なくして頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	新型コロナ感染症予防の為、人が密集している場所への外出は控えている。気候に合わせてホーム周辺の散歩や家族との外出を楽しんでいただいている。	事業所敷地内の散歩は日常的なものである。家族の希望により外出や外食を楽しまれる方もおられる。桜の時期には近くの公園で花見を楽しみ、家族と一緒に過ごす機会を持った。	

グループホームまゆの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣いはホームで預かり対応している。ただ、金銭が手元にないと不安になる方は、家族理解のもと少額を本人に持たせていただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、電話を取り次いだり手紙のやり取りをしてもらっている。携帯電話を所持している方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	地中熱システムを導入し、快適な室温湿度が保てるようにしている。リビングには季節感を感じれるような作品作りを入居者と一緒に作成したり、居心地のよい空間作りを行っている。	法人の安全衛生委員会による他施設の職員を交え、共用の空間の音や匂いなどの環境が適切な状態なのかを定期的に確認しています。事業所内は地熱を利用した24時間換気システムがあり、心地よい暖かさになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビング横にはソファを設置したり、たまたみもあるので、少人数で話をしたり交流することも可能である。 一人でゆっくり過ごしたい時等は、居室に自由に戻ることもできる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していたなじみのある家具や家族写真などを持ち込まれ、自宅に近い環境にすることで安心して生活を送ることができている。	入居時に使い慣れた家具や生活用品等の持ち込みを依頼している。居室にも壁に手摺りがあり、身体状況によってベッドの配置等安全に配慮しながら個々に合わせた設えとしている。写真や贈り物等、家族を感じることで飾りもよく見られる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム内はバリアフリーとなっており生活動線には手すりを設置している。整理整頓を行い安全に生活できるよう配慮している。手すりを活用し立位訓練などもされている方もいる。		

## 2 目 標 達 成 計 画

事業所名 グループホーム まゆの里  
 作成日 令和 7年 3月 8日

### 【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目 標	目標達成に向けた具体的な取組み内容	目標達成に要する期間
1	1	感染症対策の為、理念の唱和をしなくなったので、職員に理念の意味が十分理解されていないのではないか。	理念に沿ったケアや行動が行えるよう理念を浸透させていく。	・朝礼を開始し理念と4つの目標の唱和を再開していく。 ・ミーティングにて「まゆの里基本理念」をテーマに勉強会を開催する。	6ヶ月
2	35	避難訓練が火災想定での訓練ばかりで他の想定ができていなかった。	地震や水害なども想定した訓練を行っていく。	・防災委員が主体となり、まゆの里独自の地震や水害想定訓練を計画、運営を行っていく。	1年
3					
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。